

吉良吉影はゼロから始
めたい

憂鬱な者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

殺人鬼「吉良吉影」

彼は東方仗助達に追い詰められ、バイツァ・ダストで脱出を図るが気がつくとは彼は異世界にいた

はたして、吉良は平穏な生活を取り戻すことが出来るのか？

※この作品にはキャラ崩壊、クソ文章、原作未読などが含まれます
それらが苦手な方はブラウザバックをオラオラしてください

目次

第1話：ゼロから始まる異世界生活	1
第2話：探し物	6
第3話：徽章を巡って	12
第4話：キラークイーン（危険な女王）	23
第5話：吉良吉影は静かに暮らしたい	33
第6話：取り戻した自由	39
第7話：家庭的な男	46
第8話：芽生える気持ち	53
第9話：苦難の運命	62
第10話：吉良吉影は犬が嫌い	前半
第11話：吉良吉影は犬が嫌い	後半
第12話：シアートアタックは砕けない	89
第13話：抑えられない殺人衝動	100
第14話：秘められた欲火	108
第15話：さらなる成長	113
第16話：デッドマンズフオーチョン	121
その1	121

第1話：ゼロから始まる異世界生活

「スイッチを押させるなーッ!!」

「いやー！限界だ押すね!!今だっ!!」

カチッ

.....

「…ん!?な、何だ…ここは…!?」

わたしはさつきまで彼奴らと闘っていたはず…!!」

ふと気付くと、彼（吉良吉影）は見知らぬ街の道端にいた

「何が起った…?」

「ここは杜王町…ではないな…」

レンガの建物…西洋か?それも、中世ヨーロッパの様な…」

フラつきながら立ち上がり、左肩を押さえながら歩き出す

「幻覚ではないな…」

!!…まさかここは死後の世界…!!

い、いや…脈はある…死んではないはずだ…

だが…ここは一体何だ!?

犬の様な頭の間人などがいる…!!

壁にもたれかかりながら歩き、近くの路地裏に入る

「とりあえず考えるのは後だ…」

ちつ…東方仗助…彼奴さえ始末出来ていれば…!!

左肩の傷口を触る

「クソツ…!!」

とにかくまずは傷を手当て…しないと…

どこか…休める場所はないかな…?」

フラフラと壁を手摺り代わりに使い、路地裏を歩いて行く

「東方仗助…空条承太郎…」

彼奴らさえいなければ…わたしはこんな目に遭わずに…!!

わたしの平穏な人生を…!!」

「おい、おっさん」

「何一人でブツブツ言ってるんだ？」

しばらく歩くと3人の男に出会った

「…」

「痛い目に遭いたくなけりや出すもん出しな！」

(チンピラか…)

「悪いが…わたしは今急いでいるんだ…」

鞆も無い…君たちにあげるものは無い…」

「ああん？何も持たねえーで外歩してるわけねえだろ!？」

「つべこべ言ってるねえーで出しやがれ!!」

「ちっ…」

彼が今にも彼らを始末しようと、力を振り絞り

『キラークイーン』を出そうとした瞬間

「ちよつとそこどけー!!」

小さな人影が彼らの頭上を飛び越えた

「そこのおっさんもどけー!!」

(…子供?)

彼の目の前に現れたのは金髪の少女

一瞬、目が合ったが

少女は彼の横を通り過ぎ、すぐさま何処かに行ってしまった

「何だ…？今の子供は…」

（それに、一瞬だが何か持っていたな…）

「おっさん!!どこ見てんだよ!!」

（ちっ…空気が壊れて何とかなるかと思ったが…）

面倒だが、始末しておくか…）

「キラーク」

「待ちなさい!!」

彼がキラークイーンを出そうとした瞬間

チンピラ達の背後から声が聞こえた

「貴方達、その人から離れなさい!!」

現れたのは銀髪の少女

「何だあ?てめえ」

（次から次へと…）

「今、取り込み中だ!!」

「女は引っ込んでろ!!」

「貴方達、そんなに人を傷つけて…

覚悟しなさい!!」

「え、いやこれはちg」

「問答無用!!」

少女が手を振りかざすと、彼女の周辺に大きな氷柱が現れた

「げ!!魔法使いか!?!」

「ちっ、逃げるぞ!!」

「あ!!待ちなさい!!」

彼女は追おうとしたが、チンピラ達は何処かへ逃げて行った

(この女…!!スタンド使いか…!?!)

「くっ…」

疑問が湧いたが、彼は出血の所為で力が抜け、膝をついた

「あ!大丈夫ですか!?!」

少女が駆け寄る姿が、意識が朦朧とする中見えた

第2話：探し物

(…しまった…気絶してしまったか…

何だ？やけに後頭部が温かいな…)

ゆっくりと目を開ける

「あ、起きたみたいだね」

「!?何だ!？」

目を覚ますと目の前にいたのは人間大の猫だった

彼はそれに驚き、勢いよく起き上がり

間合いをとって身構えた

「何だ貴様は…わたしに何をした…？」

「私が頼んで看病してもらってたの」

猫の背後から銀髪の少女が現れる

「貴様はあの時の…」

確か『魔法使い』だとかあいつらが言っていたな…」

「えっと、正しくは『精霊術師』です」

「精霊術師……？」

（スタンド使いではないのか？）

「精霊術師っていうのは精霊と契約を結んだ術師のことで

魔法使いとは異なるの

精霊術師は精霊の力を借りて術を使うけど、魔法使いは自分の力を使って魔法を使う

の

それで、私の精霊がこの子、『パック』って呼んでるわ」

手乗りサイズの大きさに戻り、彼女の手に乗る

（看病していたと言ったな……）

体のあちこちを触る

（傷が無くなっている……これはこの女がやったのか？）

仗助のクレイジー・Dと同じか？ いや、魔法というやつか……？）

「体、大丈夫ですか？」

左肩にはガラス片が入ってて、あちこちの骨にはヒビが入ってて……

あの人たちにやられたんですか？」

「いや……これはちよつとした『事故』でね……

これ……君が治したのか？」

「あ、はい」

「そうか…ありがとう…とっておくよ」

ゆつくり立ち上がり、服を払う

「ところで、あの…」

その格好、他所から来たんですか？

見ない格好だけど…」

「わたしは『杜王町』から来たんだがね

「ここはどこかな？」

ネクタイを締め直しながら聞く

「ここは『ルグニカ王国』だけど…」

もりおうちょう？聞いたこと無いところ…」

「ルグニカ…聞いたこと無いな

それに王国だと…？」

「知らないのに来たんですか？」

「来た…というより来てしまった…といったところか」

ポケットに手を入れ、周りを見渡す

「あの…聞きたいことがあるんですけど、いいですか？」

「今のわたしはわからないことだらけだが？」

「あの、このくらいの大きさの『徽章』を持った人を知りませんか？」

「多分、この路地裏を通って行ったと思うけど…」

「…それは大切なものなのか？」

「はい！凄く大切なものなんです!!」

（ここを通った奴で怪しいのは、あの子供ぐらいか…）

「それらしいのはここを通って行ったな、何か持っていたが…」

「それかもしれないな」

「本当ですか!？」

「あ、でもどうやって見つければ…」

「…わたしが手伝おう」

「え？でも…」

「わたしは君に『助けられ』『治療』してもらった

君には借りがある…それを返すだけだ」

「あ、ありがとうございます」

「そう言い、2人は路地裏を出ると、聞き込みを始めた

〔取り敢えず、近くをあたるか…〕

そう心の中で呟き、目に入った店に寄る

〔…読めん〕

並んでる果物の札を見るが、何と書いてあるか彼には読めなかった
〔取り敢えず、ここは八百屋の様なものか…〕

〔聞きたいことがあるんだが、いいかな？〕

店の主人に聞き込みを入れる

〔何だあんた？〕

答えてもいいが、うちの商品を買ってからにしてほしいな

〔少なくとも、円で買えるものではないな…〕

〔すまないが、今は急いでいてね〕

盗まれたものを取り返さなくちやあいけないんだ

買うのは後にさせてもらえないかな？

〔そうか、じゃあ仕方ないな〕

この辺りで盗みをするのは、貧民街の連中ぐらいだろ

〔貧民街？〕

〔ああ、ここから向こうにずっと行った所に盗品蔵つてところがある〕

人のものを盗んでは売りさばいて金にしてるところさ」

「そうか…邪魔したよ」

「ああ、後で買って行ってくれよな」

そう言い、彼は彼女と合流しに行つた

(盗んだものを売る村か…なら、なるべく急いだ方がいいな)

「犯人は盗品蔵の人間である可能性が高い様だ

売られる前に急いだ方がいいだろう」

「盗品蔵…うん、早く行きましょう！」

(ちっ…面倒だな…)

第3話：徽章を巡って

2人は徽章を探しに、貧民街の盗品蔵へ行くことにした

数時間が過ぎ、日が暮れ始めてきた

「ここが盗品蔵か…」

貧民街と言うだけはあるな」

ボロボロの建物や、所々にいる貧しい人々を見て呟く

「取り敢えず手分けして探そう、その方が見つけやすい

30分ほどしたらここで落ち合おう」

「わかりました、見つかると良いけど…」

「それじゃあ、わたしはあつちを探してくるよ」

「そう言い、二手に分かれた

「ルグニカ王国…やはりここは中世ヨーロッパと同じぐらいといったところか…

だが、歴史上見たことも聞いたこともない文字や通貨ばかりだ…

…!!」

独り言を呟き、彼はハッと気付いた

「しまった…ここは盗品を売りさばいているところだったな…

ということとは、取り返すには金が必要か…

だが、今わたしは持っていない…あいつも財布らしきものは持っていないかった…

『ひったくる』か…？いや、それだと…」

ドンッ

角を曲がろうとした瞬間

彼は黒い服の女性とぶつかった

「おっと、危ない…

怪我は無いかね、お嬢さん」

ふらついたが、彼は逆に倒れそうになった彼女の手を掴み、支えた

「あら、優しいのね…」

「考え事をしていたよ…すまなかつたね…」

「こちらこそごめんなさい、少し急いでいたもので」

「そうか…：足元に気をつけて…：」

そう言い、彼は彼女を見送った

(今の女…：この村のじゃあないな…：それに

わたしと『同じ臭い』がしたぞ…：

手を切る時期の『彼女』と同じ臭いだ…：)

彼の顔が少し曇る

数分ほど歩き廻っていると、小さなテントを見つけた

「何だ、これは…：家…：なのか？」

少し、覗いてみるか…：」

そう言い、テントの中に顔を入れようとする

その瞬間、彼の背後から声がした

「おい、おっさん

こんなところで何してんだ」

「…：」

ゆっくり振り向く

背後にいたのは、金髪の少女だった

「君の家かね…?」

「そうだよ、何他人ん家覗いてんだ!盗る様なもんはねーぞ!!」

「勘違いしないでほしいな」

わたしは別に何か盗む気など無い」

そう言いながら、彼女に手を出す

「それより、君が盗んだものを返してほしいのだが…?」

「盗んだものを返してほしい〜?」

「そう、君が昼頃に銀髪の少女から盗んだ『徽章』を返してほしいんだ

わたしは彼女に借りがあつてね…それを返す為に必要なんだ」

「へっ、そう易々と返すかよ!

買つてくれるならいいぞ?」

(このガキ…わたしをナメてるのか?)

盗んだものに金を払つて取り返せだど?ふざけやがつて…)

「そうか…じゃあ、少しわたしについて来てくれないか?

会わせたい人がいるんだ…」

「何だよ、私はロム爺の所に行かなくちゃいけないんだ」

「…誰だそれは？」

「あつちにある店の爺さんだ」

「そこでこの徽章の値打ちを聞くんだ」

「それに、今『先客』がいる」

（先客だと？やはり他にいたのか…）

「そうか…じゃあ後でそこに一緒に行くとするよ…」

「邪魔したね…」

「そう言い、彼は急ぎ足で彼女と集合することにした」

数分後

「あ、そつちはどうでした？私の方は特に何も…」

「急いの方が良さそうだ、既にお買い手がいるらしい」

「向こうに店がある、そこで交渉するそうだ」

「え!?急がないと!!」

そう言い、2人は店まで走って行った

しばらく走り、店に着いた

「はあ……はあ……」

まだ……いるかな……？」

「ふう……体力の無さを実感したよ……」

「こんなのは何時以来かな……」

一度深呼吸し、扉を開けた

扉を開けると、中には3人の男女がいた

「あ！さっきのおっさん!!」

「何じゃ？客か？」

「その交渉……少し待ってもらおうか……？」

そう言い、2人はテーブルに向かった

「あら、貴方は何時ぞやの……」

そこには、彼が少し前に会った黒い服の女性もいた

「まさか、君が先客だったとはね……」

悪いが、徽章は彼女のものなんだ、譲ってくれないかな？」

「それ、私のもなんです！お願い!!」

「待て待て、それは商談で決めるべきだろ」

金髪の少女が割り込む

「商談……つまり、わたし達が彼女より多く金を出せばいいんだな？」

「まあ、早い話がそうだな」

「その嬢さんは聖銀貨10枚出せると言っていたが

お前さん達は出せるのか？」

（まずいな……わたし達は金を持っていない……

なら、物々交換をするしかないな……）

「わたし達は金を持ち合わせていない

だが、物々交換は出来る」

「ほお、何が出せるんじや？」

巨体の老人が詰め寄る

「……これを出そう」

そう言い、彼が胸ポケットから出したのは壊れた腕時計だった

「これは時計というものだ

時刻を正確に刻んでくれる

壊れてはいるが、直せばそれなりの値段はするものだ
これで足りるかな？」

「ふう〜む」

老人が手に取り、まじまじと見る

「確かに、歪んでる部品を直せば動きそうじゃな

それに、珍しい素材を使っておる

中々興味深い…

良くて聖銀貨10枚といったところかのう」

「では、同じ金額を出せる訳だ…

なら、元の持ち主が買うべきじゃあないかな？」

黒い服の女性を見て言う

「…そうね、残念だわ」

そう言い、コップの中のミルクを飲み終える

「じゃあ、死んでもらうわ」

「!!危ない!!」

コップを置いた瞬間、銀髪の少女に向かって光が一閃したが

それを彼の腕から現れた『もう一つの腕』が弾いた

「!?!」

彼以外のその場にいた者達が驚きの声を上げた

「やはり…貴様…『殺し屋』か…」

「あら、気づいていたのね

それよりも…貴方のその一瞬だけ見えた『腕』は何かしら？」

彼女と彼の顔が僅かに険しくなった

「貴様…見えている…のか？」

スタンド使い…ではないな？」

彼の体からドス黒いオーラが出る

「まあいい…君がスタンド使いだろうと…そうでなからうと…」

「貴方、ただの人間じゃないみたいね」

「…わたしの名は『吉良吉影』…年齢33歳…」

自宅は杜王町北東部の別荘地体にあつた…結婚はしていない…」

「？」

「仕事は『カメラユーチェイン店』の社員をやっていたよ…遅くとも夜8時までには帰宅していた…」

タバコは吸わない…酒は嗜む程度…

夜11時には床につき、必ず8時間は睡眠をとるようにしている…

寝る前に温かいミルクを飲み、20分ほどのストレッチで体をほぐしてから寝ると…
朝までほとんど熟睡さ…

赤ん坊のように疲労やストレスを残さないうで朝、眼を覚ませるんだ…

健康診断でも異常無しと言われたよ…」

「何を言っているのかしら？」

「わたしは常に『心の平穩』を願って生きている人間ということを説明しているのだよ…

勝ち負けにこだわったり、頭をかかえるような『トラブル』だとか、夜も眠れないといった『敵』をつくらない…というのが

わたしの社会に対する姿勢であり、幸福だということを知っている…

もつとも、わたしは闘ったとしても誰にも負けんがね…」

「…」

「つまり、お嬢さん…」

君はわたしの平穩を妨げる『トラブル』であり『敵』というわけさ…」

そう言い、彼のオーラから彼の『スタンド』が現れる

「『キラークイーン』と、わたしはこいつを名付けて呼んでいる…

今夜もぐっすり熟睡出来るように…『君を始末させてもらおう』

第4話：キラークイーン（危険な女王）

二人が睨み合い、緊迫した空気が張り詰める

「…『キラークイーン』というのね、それは」

「君はわたしにとって『いて欲しくない存在』であり…」

社会にとつても『危険な存在』だ…

現に君は彼女を殺そうとした、その時点で君はわたしの『敵』だ…

生かしておいても君は諦めるような人間じゃあないだろう

いつ殺されるかわかったもんじゃあない…

だから、君はここで『始末』されなくてはいけない

わたしのこの『キラークイーン』にね…」

「貴方のそれは『精霊』なのかしら？」

それとも『使い魔』といったところ？」

「これは『スタンド』と呼ばれている…」

まあ、君に教えたところで意味は無いのだが…

ところで君…殺し屋か何かの様だが？

君について…君の關係していることについて聞いておきたいな…

始末する前に…情報を集めておきたい

殺し屋は君一人というわけではないだろう？

他にも何人か、同じやつがいるんじゃないのか？」

「フフ…そんなに簡単に教えると思うのかしら？」

「そうか…じゃあ君には消えてもらうだけだ…」

彼が言い終わる瞬間、彼女は彼に目にも留まらぬ速さで切り掛かる

（速い…!!）

「しばッ!!」

キラークイーンがパンチのラッシュを叩き込み、退けさせはしたが

ナイフで防ぎ切られた

「なかなか速いのね、貴方のスタンド」

（この女…ただものじゃあないな）

「貴方はなかなか楽しめそうね」

そう言い、彼女は彼の周囲を高速で飛び回り始めた

（速い!!目で追えない!!）

瞬間、彼の背後から切り掛かって来た

「くっ…!!」

紙一重でキラークイーンの腕で防いだが

再び背後から襲われ、肩を切られた

「ぐ…!!」

体勢が崩れた瞬間、今度は左から襲って来た

「…!!キラークイーン!!」

ギリギリでキラークイーンの交差させた腕で受け止める

「うふふ…ナイフは一つだけじゃないのよ?」

そう言い、彼女は懐から2本目のナイフを取り出し

彼の腹を目掛けて切りかかる

「くっ…!!」

キラークイーンの手蹴りで何とか防いだが

今度は二刀流の連撃を仕掛けて来た

「うぐ…!!」

(速い!! 仗助のクレイジー・D程ではないが、防ぐのでやっとなだ!!)

わたしのキラークイーンは格闘戦に向いていない…

何とかしなくては…!!)

「ほらほら、それだけかしら〜?」

彼女の連撃を何とか防ぐが、少しずつ押される

「くっ…!!」

野郎オ——ツ!!」

切り掛かる瞬間を狙ってナイフを2本とも弾き飛ばし

彼女の腹にパンチを一撃打ち込み、壁まで吹っ飛ばした

「ふう…なんて速いやつだ…」

一息つき、顔の汗を拭う

「うふふ…今の凄い効いたわ〜」

破れた壁の向こうから現れる

「ちっ…」

（キラークイーンのパンチを食らったのに立てるとは…

なんてタフな女だ…

だが…『距離』は取れた!!」

彼女が3本目のナイフを取り出し、ゆっくり歩いて来る

「…君のおかげでわたしは勝てそうだよ…」

「?それはつまり、貴方には何か勝てる策でもあるのかしら?」

「ああ…そうだよ…」

『血』…こんなにいっぱい出てるだろう…?」

そう言い、彼は溢れ出る血を手で掬う

「しばッ!!」

すると、彼はキラークイーンでその血を高速で彼女に向かって飛ばした

「!!」

彼女はナイフで振り払ったが

血の一部が彼女の左肩に『貫入』した

「まさか…仗助の奴に学ばされるとはな…」

「血を高速で飛ばして刃物のようにしたのね…」

「これが貴方の秘策なのかしら?」

彼女がそう聞くと、彼はネクタイを締め直しながら答えた

「ああ…これがわたしの策であり…」

そして…君はもう『始末』されている…」

その場にいた全員が首を傾げた

「キラークイーンにはちよつとした『特殊能力』があつてね…」

「特殊能力?」

「そう…」

キラークイーンの『特殊能力』…

それは…キラークイーンは触れたものはどんな物質だろうと『爆弾』に変えることができる…

何だろうと…例え『血液』だろうと…クク…

「!!まさか!?!」

彼女が自分の左肩の傷を見た瞬間

カチツ

彼女の体が爆発した

「これで今夜も安心して熟睡できる…」

彼がそう言い、呆気にとられている銀髪の少女達の方に行こうとすると

「…う…うっ…」

爆煙の中から呻き声が聞こえ

振り向く

「ふむ…一発では死ななかつたか…」

やはり、全部当てなければダメだったか…」

爆煙から現れたのは、肩がぐにやぐにやに変形した黒い服の彼女だった

「何が…起きて…?」

自分の変形した肩を見て呟く

「君はキラークイーンが爆弾に変えたわたしの血で爆破されたんだ…」

キラークイーンは触れたものは何だろうと爆弾に変えられる…

キラークイーンの爆弾は、相手の肉体を内部から爆破するんだ

君の場合、肩の肉と骨が中でシイクされたようだね…」

這い蹲る彼女の側まで歩き、持っているナイフを蹴つ飛ばす

「さて…君を『吹っ飛ばす』前に…君について、君の関係者について聞かせてもらおうか

…?」

「…いいわ…教えてあげるわ

私はただの雇われた殺し屋よ…」

エルザ・グランヒルテ、それが私の名前…『腸狩り』なんて呼ばれてるわ…」

「随分と物騒な名前じゃあないか…」

腹を切つて内臓を觀賞するのか? 気味の悪い趣味だ…」

「そう?…貴方も同じじゃないかしら?」

「…さあ…何のことかな？」

彼がそう言うのと彼女は猛スピードで彼から離れた

「…」

「うふふ…貴方、面白い人ね

今は一旦退いてあげるわ、またいつか会いましょう」

そう言い、彼女は蹴り飛ばされたナイフを拾い、窓から逃げた

「あー逃げた!!」

おい、おっさん！何で逃したんだよ!？」

金髪の少女が彼に聞く

「逃した…？ちよつとまで…わたしは逃してなどいない…

言っただろう？わたしは既に『始末』したと…」

「え？」

「キラークイーンは既にナイフに『触れている』…」

カチツ

「さて…『徽章』は彼女に返してやってくれないかな？」

「あ、ああ…わかったよ…ほら」

そう言い、少女は銀髪の少女に徽章を渡す

「ありがとう、えつと…『吉良』さん…でしたっけ？」

あの、助けてくれてありがとうございます！

何てお礼をすれば…」

「礼はいい…」

わたしは借りを返しただけだ…」

「なら、返させてください！」

貴方は徽章を取り戻すのを『手伝った』上、私の命を『助けて』くれました！」

「…」

「だから、何かお礼をさせてください！」

「なら…君の名を教えてくださいませんか？」

まだ、わたしは君の名を聞いてない」

「え、そんなことでいいんですか？」

「君はわたしの名を知ったんだ、君も名乗るべきじゃないかな？」

「は、はあ…」

エミリア…私の名前は『エミリア』です…よろしくお願いします」

「エミリア…ふむ…良い名前じゃあないか…

それじゃあ、わたしはこれで失礼するよ…」

そう言い、彼は店を出ようとする

しかし

バタツ

扉に手をかけようとした瞬間、彼は倒れた

「だ、大丈夫ですか!?!」

「おっさんどうした!?!」

（しまった…血が足りない…

仗助達との闘いに続いて、ここでの闘い…随分と出血したからな…

本当に…こんな酷い一日は生涯初めてだ…）

彼女達が心配する中

次第に彼の意識は遠のいていった

貧民街の盗品商で倒れたところをエミリア様達が運んで来て
手当をしたところですよ」

「…そうか」

左肩を触り、傷の有無を確認する

(また消えている…あいつがやったのか…?)

「…ところで、わたしの服はどうした？」

寝間着の様な服に気付き、彼女に聞く

「ボロボロで汚れていたのを洗濯し、繕っておきました」

「…そうか」

「朝食の御用意が出来ますので、お風呂からお上がりになったら

食堂の方へどうぞ

場所は御案内します

レム、任せたわ」

「はい、お姉さま」

そう言われ、彼は水色の髪の子供について行った

「レムがお風呂場ですよ」

着替えを用意しておきますので、上がったらお声がけください」

「…わかった…ありがとう」

そう言い、彼は風呂場に入った

(…ここはロズワールという貴族か何かの屋敷か…)

わたしはまた…あの女に助けられたのか…うゝむ…)

体を洗いながら考え込む

数分ほどし、彼は風呂場から出た

体を拭き、扉の向こうに声をかける

「今、上がったよ…」

「はい、繕っておいた着替えです

あれ？髪が黒くなってる…」

「ん？ああ…染めていただけだよ…」

着替え、ありがとう」

元のスーツに着替え、彼女について行き、食堂に向かった

扉を開けると、広い部屋に大きなテーブルがあり

朝食が用意されていた

そこにはエミリアが既に座っていた

「あ、おはようございます」

「…おはよう」

彼女達に案内された席に座る

ふと目をやると、隣には金髪のツインテールの少女がいた

「…おはよう」

「ん…」

声をかけたが、チラツと彼を見て小さく返事をしたただけだった

しばらくすると、1人の男がやって来て真ん中の席に座った

（…なんだあの男は…？ピエロか…？）

「ふくん、君がエミリア様を助けてくれたという人だかね？」

「…まあ、そうだが」

（なんだこいつ…）

「この度はとても感謝するよ」

もし、エミリア様が殺されたら私にとってもとても困るからね」

「…」

「私はロズワール・L・メイザース

この屋敷の主人だよ」

「…わたしは吉良吉影だ…一つ質問をしていいか？」

「ん？？」

「彼女は徽章を随分と大切にしていた様だが…

あれは何か特別なものなのか？」

「これは『王選』の候補者の資格を示す大切なものなんです」

「王選…？」

「はい、ルグニカ王国の次期国王を決める為のもので

この徽章はその候補者の証なんです」

（大統領を決める選挙の様なものか…）

「つまり、それが無かったら君はその王選に出ることが出来なかったわけか」

「はい、取り戻してくれてありがとうございます」

「彼女を助けてくれた御礼を私からもしてあげたいのだが

何か希望はあるか？」

「…御礼…か」

(わたしはまだ、ここに來たばかりだ

それに、この言語も知らない上、金も無い…

住むところも無い…)

一呼吸置き、彼は答えた

「わたしの望みはただ一つ…『平穩な生活』だけだ…

わたしをここで『雇って』くれないか？」

第6話：取り戻した自由

ロズワール邸にて

彼は自ら「雇ってほしい」と申し、ロズワール邸の従者となった

「それでは先ず、ここで働く為に制服を用意します」

「ふむ、執事といったところか」

水色の髪の少女から制服を受け取る

彼は着替えながら2人のメイドの少女に聞く

「ところで、君達の名前をまだ聞いていなかった…いいかな？」

「妹の『レム』です」

「レムの姉の『ラム』よ」

（水色の方がレム…ピンクの方がラムか…）

「君達は双子か…？」

「はい」

「なるほど…何を担当しているのかな？」

「私は掃除、洗濯、料理、裁縫など…家事全般をやっています」

レムが答える

「私はほとんどやってないわ」

「…」

ドヤ顔で答える彼女を冷たい眼で見る

「…ふむ、サイズはピッタリだ」

そうだ、わたしの名前をまだ言っていないなかったかな？

わたしの名は『吉良吉影』だ…これからよろしく頼むよ…」

「では吉良さん、まずは屋敷内の掃除をしますのでついてきてください」

着替え終わり、彼女達について行く

「ここに道具がありますから、これを使ってください」

私は各部屋をやりますから、吉良さんは廊下をやってください」

「わかった」

そう言い、彼は箒や雑巾など、一通りの道具を持って行った

「さて…と、まずは箒で大きなゴミを集め…壁の埃を落とす…」

次に床を拭き取る…しつかり壁と床の隅も拭かないとな…
家具の下なども見落としちゃダメだ…

ふむ…窓拭きはどうか…新聞紙があればいいのだが…
あれこれ工夫するなどし、黙々と掃除を進める

数十分後

「吉良さん、掃除の程はどうですか？」

「ん…ああ、順調だよ」

「この屋敷は広いからね…中々堪えるよ…」

「…凄い、床も壁も窓も全部ピカピカ…」

「普通は此処まで出来ないのに…」

周囲を見渡し、塵一つ無い廊下に感動する

「吉良さんは前は何をしていたんですか？」

「ん？ただの平凡なサラリーマンだよ」

「さーらーまん？」

「なに、几帳面なだけだよ…」

「そうですか…、次は庭の手入れをしますから、片付けたら玄関前に来てください」
「わかった」

「待たせてすまない」

「いえ、それではついて来てください」

そう言われ、彼女と一緒に外に出る

「それでは、吉良さんは雑草や伸びた芝を刈ってください

私は植木の手入れをしますので、終わったら手伝ってください」
「わかった」

黙々と芝刈りを進めながら

彼はふと、ただジツと見つめてくるラムの方を見た

（あいつは何をしているんだ…）

手伝いもせず、偉そうに突っ立って…まあ、放っておくか…）

数十分後

「ふう…やっと終わったよ…」

「お疲れ様です、しばらくしたら昼食の用意をしますので

それまで、休んでいてください」

「ありがとうございます」

顔の汗を拭い、屋敷に戻る

彼は用意された自分の部屋に戻り、ストレッチをしていた

ドアをノックし、レムが入ってくる

「失礼します

紅茶を淹れたので、よかつたらどうぞ」

「おお、ありがとうございます」

彼女はティーセットを載せたワゴンの上でカップに紅茶を淹れ

彼に渡す

香りを嗅ぎ、一口飲んだ

「…ん、良い紅茶じゃあないか

結構良いやつじゃないのか？いいのか、わたしに？」

「はい、少しだけ残って古くなってたものですから

それに、吉良さんはとても頑張ってくれましたから…

もうしばらくしたら昼食の用意ですから、来てください」

「ああ、ありがとう」

そう言うと、彼女は出て行った

ティーカップを片手に、窓際の椅子に座り

彼は外を眺めていた

「美しいところだ…ルグニカ王国…

車など、近代的なものが無いようだから少し不便だが…

緑が多く…空気が澄んでいて、とても気持ちいい

特にここなんかは周りには何も無く…とても静かだ…

こんな良いところが今まであつたかな？

杜王町も良いところだったが…ここもとても良いところだ

奥にうつすら見える山と美しい木々を見渡し：

小鳥の囀りを聴きながら美味しい紅茶を堪能する：

こんなに素晴らしいことが他にあるだろうか？

仕事も良い：

掃除や庭の手入れ：中々新鮮でいいじゃないか：

それに、信じられないがここは、わたしが元いたところとは別の世界だろう

この世界にわたしの正体を知る者はいない：

だから、わたしはもう『川尻浩作』として振舞わなくていいんだ：

わたしが『吉良吉影』と名乗ろうが『川尻浩作』と名乗ろうが関係無い：

わたしの正体を知るもの：わたしを追うものは誰もいない：！！

ククク：クソつたれ仗助や承太郎の心配は無い：

わたしは自由だ：自由になったんだ：！！

ク：クク：フフ：フハハハハ：！！

満面の笑みを浮かべ、息を殺しつつ、彼は心の底から笑った

第7話：家庭的な男

「…さて、そろそろ行くか…」

そう言い紅茶を飲み干すと、ティーセットを片付け調理場に向かった

「待たせてしまったかな？」

「いえ、大丈夫です」

それでは早速ですが、昼食の準備をしますから手伝ってください」
「わかった」

そう言うと彼は上着を脱ぎ、袖を捲ると

彼女に言われた通りに料理を作り始めた

だが、驚くことに彼は

野菜や果物の皮を剥き、食材を切り、火を通し

味付けから何から何まで、用意するものの殆どを一人で終わらせた

そんな彼を彼女達はただ呆然と見ているだけだった

「ん？どうした、手が止まつてるじゃないか」

「え、あつ、すみません…」

「君たちは歳下とはいえ、わたしの先輩なんだから

君たちがしつかりしてないと困るよ」

「ごめんなさい…」

手を洗いながらレムに言う

「まだ、手伝うことはあるかな？」

「大丈夫です…」

吉良さんは料理とか得意なんですか？」

「別に得意というわけでもないよ…」

ある程度は1人で作れるってだけさ」

「そ、そうですか…」

殆ど立場が逆になった様なか

昼食の準備は終わった

(結構な量だったからか…少し肩が疲れたな…)

肩を揉みながら、部屋に向かって1人廊下を歩く

すると、なんとなく通り過ぎた扉に違和感を感じた

「…」

(この扉…何か感じる、誰かいるのか?)

すると彼は、扉をノックする

(返事が無いな…開けてみるか…)

そう思い、ゆつくりと扉を開けた

そこで彼が目にしたのは、大量の本の中

1人本を読んでいる金髪の少女だった

「…」

(こいつ…朝、隣に座っていたやつだ…)

「何か用かしら?」

本を閉じ、彼を見つめる

「ここは図書館…いや、書庫か?」

「ええ、正しくは禁書庫

」

「いや、何となく違和感を感じて入ってみただけだ

朝、会ったが名前を聞いてなかったが、良いか？」

「そ、私は『ベアトリス』」

「この禁書庫の司書をしてるわ、あんたの名前は聞いているわ『吉良吉影』よね？」

「ああ

「この屋敷にはこんなに広い書庫があつたのか…

少し見せてもらつてもいいかな？」

「…好きにすれば」

「わかつた」

「そう言い、彼は適当に本棚から一冊本を取り

開いた

「…」

（全く読めん…

やはり、ここの世界の言葉はわからないな…どうしたものか…）

本を閉じ、棚に戻す

「ありがとう

また今度、来てもいいかな…？」

「…いいけど」

「ありがとう」

そう言い、彼は禁書庫を出た

正午辺りになり、昼食を済ませ

彼はレム達に声をかけた

「すまないが、この国の言葉を教えてくれないか？」

「突然どうしたんですか？」

「いや、わたしはこの国の生まれじゃなくてね…」

この国の言葉はまだわからないんだ

教えてくれると助かるんだが…」

「…わかりました、私でよければ」

「すまない、助かるよ」

そう言い、レムと一緒に部屋に戻った

「それでは、とりあえず簡単なものから教えますね」

そう言い、彼女は子供向けの本を取り出した

「吉良さんは、基礎的なところから知らないみたいですので

そこから教えますね」

「わかった」

そう言い、彼はぶっ続けで教えてもらった

数時間後

「…それでは、そろそろ夕食の準備をしますので

吉良さんは手伝わなくてもいいですから、勉強に集中してください」

(吉良さんがいると、あまり立場が無いですから)

「すまない…」

そう言い、彼女は心なしか少し笑顔で出て行った

「ふう…、大分わかって来たな…」

我ながらよく出来た：

もう、この本を読める程になったのは自分でも驚きだが

こんな苦勞をしたのは『川尻浩作』の筆跡を真似るのを練習した時以来か：

まあ、もう川尻浩作の筆跡を真似る必要なんで無い：

フフフ：仗助や承太郎のやつら：

今頃、わたしが突然消えて慌てふためいているだろうな：

まさか、追いつめられたわたしが

今、悠々自適な生活を送っているなんて夢にも思わないだろう：

ククク：やはり、この吉良吉影：強運に守られているんだ：

わたしは『生き延びる』：平和に『生き延びて』みせるぞ：

ククククク：

窓から見える沈み行く夕日を眺め

不敵な笑みを浮かべる

第8話：芽生える気持ち

ロズワール邸で暮らすこと3日

とある日の夜

吉良の部屋にて

「ここでの生活にもだいぶ慣れて来たな…

仕事もそれ程辛くないし、居心地も悪くない

この国の文字なども大体覚えた…金もそれなりに貰える…

フツ…順調だぞ…」

そう呟きながら、窓枠に手をつき

夜景を眺める

「だが、この先どうするか…

この屋敷の住人を殺るのはマズい…

王選とか言ってたな…

あの女を殺したら候補者が突然行方不明になり、怪しまれる

あのロズワールとかいう奴も迂闊に手は出せない：

始末出来ても、それなりに知名度のある奴だろう

消えたら怪しまれる：

あの双子の女も難しい：

何より、わたしのキラークイーンは多数を相手に闘うのは難しい

とにかく、この屋敷の奴らを敵に回すのは無理か：

どうしたものか：

そう呟き、ふと中庭に目をやるとエミリアがいた

（あの女：一人で何をやってるんだ？）

あの蛍の様な光と喋ってるのか？）

気になり、彼は彼女の元に行った

「…何をしているんだ？」

「あ、吉良さん

今、微精霊と話をしていたんです」

「微精霊？」

「はい、精霊の中でも特に力の弱い精霊のことで
ほとんど姿も無いんです」

「なるほど…」

（この小つこい奴らが微精霊か…）

「吉良さん、大分ここに慣れて来たみたいですね」

「ん、そこそこだがな…」

わたしがこうして今此処にいられるのも君のお陰だよ…

そういえば王選、だったかな？

国の王になるなら、それなりに何か目標とかあるんじゃないか？

君が王になったら国をどうするつもりなのかな…？」

彼がそういうと彼女はその場に座り

答えた

「…私はこの国の人達みんなが幸せになれる様にしたいんです

争いや差別が無い様な

みんなが優しく、みんなが笑顔で暮らせる国にしたいんです…」

彼は少し間を置いて口を開いた

「…そうか

いいじゃないか…平和が一番…

わたしも君の考えには同意するよ…

わたしの望みは『平穏な生活』ただ一つ…

君が王選に勝てる様に、願ってるよ…

そう言うのと、彼女は少し意外な表情をし

笑顔で言った

「ありがとう」

「…」

その笑顔を見て、彼はつい目を逸らした

「…暗いから足元に気をつけた方がいい」

「ありがとう、あっ！」

そう言い、彼女が屋敷に戻ろうとすると

彼女が躓いた

「!!」

彼は無意識のうちに彼女の肩を掴み、支えていた

「あ、ありがとう」

「…いや、無事でよかった」

そう言うのと、2人とも屋敷に戻った

(この吉良吉影…今、ホツとしたのか?)

また…、いや、これは彼女に何かあつたらわたしの人生の計画が狂うからだ
そうだ…：そうに違いない…

わたしが他の人間を心配するなど…)

そう思いながら、彼は部屋に戻り
寝ることにした

翌日

彼はいつも通り仕事を済ませた

昼過ぎにて

「さて、部屋に戻るか」

そう言い、庭を歩いているとエミリアを見つけた

(また、微精霊とやらと話しているのか?)

「そういや、あいつら…スタンドが見えていたな…

気になる…聞いてみるか…」

「そう思い、彼女の元に行った

「また、微精霊と話しているのか？」

「あ、はい

「私…あまり人と話さないから…」

「…一つ聞きたいことがあるんだが、いいか？」

「え？いいですけど…」

「それを聞くと、彼はキラークイーンを出した

「君は『これ』が見えるか？」

「は、はい

『スタンド』っていうんですっけ？」

「ああ、わたしも詳しくは知らないが

スタンドはスタンド使いにしか見えないという…

「何故、スタンドが見えるんだ？」

「そ、そんなこと言われても…困ります」

そう言うと、彼女の肩からパツクが現れた

「多分だけど、それは僕達が魔力とかに敏感だからかもしれないね」

「? どういうことだ」

「多分、そのスタンドっていうのは何か特別な力が像として現れてるもので

普通の人には、その力が弱すぎて見えない

でも、僕達精霊や魔法使いとか、そういうものを扱える人には

僅かな力でも見えるんだと思う

幽霊みたいなものだね」

「なるほど…だから見えたのか…」

「そういえば、お前は何か使えるのか?」

「僕は熱を自由に操れるんだ

熱を下げて、氷を生み出したり出来るよ

君のそれは何が出来んの?」

「…特に答える必要は無い」

「えー、ケチだなー」

「ふん」

「あはは…」

2人のやりとりを見て、彼女は苦笑した

「ところで、魔法というのは魔法使いにしか使えないのか？」

「んー、マナがあれば基本的に誰でも使えるよ」

「マナ？」

「体内や空気中にある魔法の元になるもの

まあ、燃料みたいなものだね

魔法使いは体内のマナを消費して魔法を使う

魔法は火・水・風・土の基本属性と陰と陽の2つの6つの属性があつて

大抵は基本属性に適性を持つてる人が多いね」

「つまり、適性があれば使えると」

「まあ、簡単に言えばそうだね

君も何か適性があるんじゃない？」

「本当か？」

「見てみようか？」

「ああ、頼む」

そう言うのと、パツクが彼の体に触れる

「んー、陰だね」

「陰…何が出来るんだ？」

「まあ、相手の視界を遮る闇を作ったり、重力の無効化や時間の流れを変えたりだね」

「そうか…ありがとう」

好きでも嫌でもない微妙な顔をする

「まあ、色々知れてよかった

少し気になっていたからな…これでスッキリした…」

「よかったね」

「ああ、また色々聞かせてもらおうよ

それじゃあ、わたしはそろそろ戻るとするよ」

「ばいばい」

そう言い、彼は屋敷に戻った

第9話：苦難の運命

翌朝

彼はいつも通り仕事をこなし

朝食を済ませた

廊下を歩いていると、レムがやって来た

「吉良さん、食材の在庫が残り少ないので買い出しを手伝ってくれますか？」
「ん、ああ構わないよ」

そう言い、2人共支度をし

玄関に集まった

「姉様は留守番をおねがいします」

「わかったわレム」

するとそこにロズワールもやって来た

「私も用事があるから出かけてくぐるよ

朝までには帰る予定だ〜からね〜」

「はい、行つてらつしやいませ」

そう言い、3人共外に出た

「それじゃあ、君達もよろしくね〜」

そう言うと、彼は宙に浮き

猛スピードで空を飛んで行つた

（魔法使いは空も飛べるのか…）

まるでメルヘンやファンタジーだな…）

そう思いながら、街に向かって歩いた

しばらく歩くと、小さな村に出た

「こんなところに村なんてあつたのか…

森に隠れて気づかなかつたな…」

周りを見渡していると

村人達が物珍しそうに彼を見に来た

「おや、あんた見ない顔だね、どこから来たんだい？」

「その格好、あそこの屋敷の人だろう？名前なんていうんだい？」

（なんだこいつらは…寄ってたかつて質問して…）

適当に答えてさっさと出るか…）

そう思い、彼は自然な振る舞いで適当に答え

少し先にいるレムに早足でついて行った

少し歩くと、レムが立ち止まって何かを見ていた

「どうした？」

視線の先を見ると、子供たちがいた

奥の子を見ると、子犬を抱えていた

「なんだ…犬か…」

「かわいいですね」

すると、子供たちが寄ってきた

「あー、知らないおじさんだー」

（おじさんだと…）

「見て見て、子犬見つけたのー」

お下げの少女が彼に子犬を見せつける

「すまないが遠慮するよ…犬にはあまりいい思い出が無いのでね…」
(なんだこの犬…頭が禿げてるぞ…)

彼が引くと、レムが子犬を撫でた

「かわいいじゃないですか」

彼女が撫でてると、子犬が彼女の手を噛んだ

「痛っ！」

「ふん…これだから犬は好きじゃない…」

「むっ」

彼女が彼を睨むと

彼は目を逸らした

そんなことがありながらも、街に着いた

「久しぶりに来たな…」

で、何を買うんだ？」

「えっと…」

街中を周り、食材などを買い集めた

「…まさかこれをわたしに運べと？」

大量の荷物を見て、彼女に嫌そうな顔を見せる

「はい、いくつかは私も運びますから」

(…いつ…)

少しイラツとしたが、仕方なく運ぶ事に決めた
すると背後から声が聞こえた

「お、あんた久しぶりだな」

「…確かあの時の」

声をかけて来たのは

以前に貧民街について教えてくれた店主だった

「その嬢ちゃんはあるの同僚かい？」

「まあ、そんなところかな…」

そうだが、この前買うつて言ったかな…

それ一ついいかな？」

「おう、リングな、毎度あり！」

「ありがとう」

(リング？リングゴじゃないのか…)

「吉良さん、そろそろ昼になつちやいますから急ぎましょう」

「ああ、すまない」

そう言うのと、リングを片手にキラークイーンを出し

荷物を持たせた

道中にて

「…便利ですなそれ」

「まあね…キラークイーンはそれなりにパワーはある」

リングを齧りながら話す

「それより『手』大丈夫か？」

「あ、はい」

大して血も出ませんでしたから」

「そうか…」

少し手を見過ぎな気もするが

それがどうい理由かは本人にもわからなかった
ただの『気遣い』か…彼の『サガ』なのか…

しばらく歩くと屋敷に着いた

「お疲れ様です

吉良さんは休んでいてもいいですよ」

「そうか、そう言うならそうさせてもらおうよ…」

そう言い、彼は部屋に向かった

向かう途中、また廊下の扉に違和感を感じた

「…また、あの時の感じだ…」

とりあえずノックをし、扉を開けると

そこにはベアトリスがいた

「？確か禁書庫はもう少し先にあつた筈…」

まさか、これも魔法…か…？」

「…随分と鋭いのかしら？」

「…やはり、魔法か何かか…」

中に入り、扉を閉める

「正確には『扉渡り』という能力

屋敷内の部屋を自由に移動できるわ」

「…それは凄いが、相手にとっては迷惑だな…」

「ふん」

「せっかくだ…読書でもさせてもらおうよ…」

そう言い、適当に本を選び

読み始めた

「…聞きたいことがあるんだが…いいかな？」

「何かしら？」

「この本に書かれている『サテラ』というのは何者だ？」

数秒の沈黙の後、彼女が答えた

「…そうね、一言で言うなら『魔女』かしら」

「有名なのか？」

「ええ、少なくともルグニカで知らないものはいないかしら

嫉妬の魔女サテラ…他の6人の魔女を滅ぼし、世界の半分を飲み込んだという魔女…

今では封印されてるけど、完全ではない…

あまり人前でサテラのことを言うのはやめた方がいいかしら」

「そんなものがこの世界にいるのか…」

再び本に目を通し、絵を見る

（この絵…エミリアに似ているな…同一人物とは考え難い…

世の中にはそっくりな人間が3人いると言うが…

ただ、似ているだけか？

だが、この魔法がそれほどの存在なら、彼女は差別的なことをされるかもしれん…

人と話すのは少ないと言っていたな…

可能性はあるな…）

少し真剣な顔つきに、彼女も気付いていた

（本当に勘のいいやつ…）

しばらく何冊か本を読み、読み終わると

彼女に質問をした

「魔法や加護などは大体理解した…

ところで『呪い』とはどういうものなんだ？」

「…そうね、簡単に言う」と

相手に接触することで付け、後から発動し

対象を殺すもの…かしら」

「つまり…相手に触れ、後から作動すると？」

「平たく言うとそうかしら」

「時限爆弾の様なものか…」

(こつちの呪いとは違うのか…)

「でも、呪いは術式が発動する前なら解除出来るけど

発動したら解除は出来ない…

もし、解除するなら術をかけた本人を殺すしかない…

何でこんなこと聞くのかしら？」

「ただ、本で見て気になっただけだよ…

色々為になった…また暇があつたら来るよ…」

そう言い、禁書庫を出た

特に変わったことも無く

普段通り彼は過ごした

その夜

今日も安心して眠れる…そう思っていた

薄暗い中、廊下を歩いていると何かを見つけた

「誰かいるのか？」

そう呟き、近づいてよく見ると

「!?…レム!!」

倒れていたのはレムだった

「はあ…はあ…」

「息が荒い…病気か…？」

いや…朝も昼も元気そうだった…この短時間でなるとは考え難い…

毒か…? いや、それも考え難い…

仮に食事に入っていたとしたら、わたしもなっているはず…

今日は調理場にわたしもいた…

調理中に入れられた可能性は無い…

運ぶ時も一緒にいた…

としたら…考えられるのは…まさか…!!」

その時、彼の脳裏に一つの言葉が思い浮かんだ

「『呪い』 ツ!!」

冷汗をかき、彼女の手を強く握る

(考えられるのはそれしか無い…!!)

呪いは接触することでかけられると言っていた!!

今日、彼女が接触したのはあの『犬』だけだ!!

今日見た本にもあった…魔獣というものがいると…

まさか、あの犬が魔獣か!?

だとしたら…あの村もマズい…!!

他人が死ぬのはわたしとしては如何でもいい…

だが…彼女が死ぬのはわたしにとってマイナスだ…

村人は…)

彼は彼女を抱え、立ち上がった

「殺されると解っていて、見殺しにするのは気分が悪い…

だが、何よりも…あの犬はわたしにとって『害』だツ!!」

第10話：吉良吉影は犬が嫌い —前半—

レムを抱え、彼は玄関まで走った

玄関に着くと、そこにはラムがいた

「!?レム!! 一体どうして…!!」

「呪いだ…」

今日の昼ごろ、村で犬に手を噛まれた

あの犬が魔獣というものの可能性がある

術はもう発動している様だ…助けるにはその犬を始末するしかない」

「…その証拠はあるの?」

「それ以外に考えられない

わたしを疑っているのか…?」

「そういうわけじゃないけど…」

「とにかく衰弱が激しい…」

もって朝日が昇るまでか…」

そう呟くと彼は彼女にレムを預けた

「え、ちよつと!!」

まさか……1人で行くつもりじゃ……!!」

「……わたしは平和な生活を何より望んでいる

それを脅かすものは何者だろうと生かしてはおけない……

それに……その娘とはそれなりに付き合ひがあるからね……

死ぬとわかつていて見殺しには出来ないよ……

それに、君も死なれたら困るだろう?」

「……わかつたわ

ラムも行く」

そう言うのと彼女はレムを抱えて部屋に向かった

「後で行くから、無理はしないで

……レムはラムの大切な妹

ラムには助ける義務があるもの」

「……好きにするといい」

そう言い、彼は村に向かって走って行つた

「…この騒ぎ、やはり思った通りだ」

村に着くが、あちこちで人が話し合っていた

とりあえず、彼は話を聞いてみた

「何があつた？」

「あ、あなたは確かあの屋敷の…」

村の子供達がいなくなったんだ

多分、森の方に行ってしまったのかもしれない…

いや、魔獣に連れ去られてしまったのかもしれない」

(やはり遅かったか…)

そこにラムもようやく到着した

「はあ…はあ…どうしたの？」

「村の子供達も連れていかれた可能性がある」

「そんな…早く助けないと！」

「待て、焦ってはいけない…」

こんな時こそ、落ち着いて状況を把握し、冷静に対処しなくてはダメだ
闇雲に行っても返り討ちにあう可能性が高い

視界が悪い上に、何よりこの森は魔獣のテリトリーだ

圧倒的にこつちが不利だ

慎重に行くんだ…」

「…わかったわ」

そう言うのと、2人とも呼吸を整え

森に足を踏み入れた

「見て、結界が壊されてるわ」

「結界？あの石がそうか…」

だが、これはあの魔獣を踏み入れさせない為のものじゃあないのか？

魔獣が壊したとは考え難い」

「…そうね、誰かがやったのかもかもしれないわ」

(まさか、新手の暗殺者…だろうか…)

「吉良、レムを噛んだ奴に特徴はある？」

「そうだな…頭の一部が禿げていたぐらいだな…」

「そう…」

しばらく進んで行くと、開けた所に出た

「！吉良、あそこ！」

彼女が指差した所を見ると、子供達が倒れていた

「大丈夫だ、息はあるし正常だ……」

だが、何故こんなところに……」

「誰かが置いた……可能性があるわ」

「……ん？」

待て、1人いないぞ……！

あの犬を抱えていた娘だ！」

すると、1人の少女が口を開いた

「森の……奥に連れて行かれてた……」

「森の奥だと……」

魔獣の住処じゃないか……」

彼は一瞬考え込み

ラムに言った

「わたしはもう1人の娘を助けてくる……」

君はこつちの子供達を非難させておいてくれ…」

「え、1人で行くつもり!？」

「子供達を放置するわけにはいかないだろう

レムを助ける代わりに子供達を見捨てる気か？」

「う…」

わ…わかったわ…気をつけて…」

「頼んだ…」

(やれやれ…厄介なことになった…)

そう言い、彼1人森の奥に行った

(しかし妙だな…)

ここは魔獣の住処のはず…それなのに一向に現れる気配が無い…

だが、それは逆に厄介だ…

わたしはあの犬を始末しなくてはならない

まさか…何か企んでいるのか…?)

草を掻き分けながら進んで行くと、少しだけ開けた場所を見つけた

そこには倒れた丸太があり

その影に人の足が見えた

「むっ……」

（あれは子供の足……あの娘か……）

だが、この状況……

明らかに罠だ……迂闊に近付けない……

この吉良吉影の勘に間違いがなければ、近付いた瞬間襲われる……

ゆっくり、周りを回って確認するか……）

彼は木の影から影に移動し

少女の顔が見える場所まで移動した

（気配は無い……助けに行くか……）

呼吸を整え、姿勢を低くし

足音を立てずに素早く近付いた

「よし……息はある……」

早くここから離れるか……」

そう呟き

少女に手を伸ばした瞬間

彼の背後から草が揺れる音がした

「やはり来たか…」

だが、わたしをナメるなッ!!」

振り向くと同時に、魔獣が飛びついてきた

「キラークイーンッ!!」

ボギャアア!!

キラークイーンを出すや否や

キラークイーンの膝蹴りが魔獣の顎を砕いた

「…わたしは犬が嫌いだ…」

『あの時』…あの犬さえいなければ『重ちー』とかいうガキと会わずに済んだ…

そうすれば、クソつたれ仗助や承太郎達に会うことも無かった…

あの日以来、わたしは犬が嫌いだ…」

血を吐き、痙攣する魔獣を見下ろす

だが、膝蹴りの音につられる様に

あちこちから無数の魔獣が現れた

そして、彼の前にはあの時の子犬もいた

「…いっしょに

待ち伏せしていたのか…」

そして、あの禿げ犬…

あの目…彼奴が『犯人』であり『頭』か…」

少女を丸太に寄りかからせ、一歩前に出ると

上着のボタンを外し

スタンドのエネルギーを滾らせた

「このクソ犬どもッ…!!」

わたしの平穩を乱すものは何であろうと生かしてはおけない…!!

今夜11時まで…安心して熟睡できる様…

全員、木っ端微塵に消し飛ばしてやるッ!!」

第11話：吉良吉影は犬が嫌い　—後半—

「しばッ!!」

キラークイーンのラツシユが次々と迫り来る魔獣を容赦無く粉碎する
「ちっっ!!」体何匹いるんだ…!!

かれこれ5く6分…

2く30匹は始末しているというのに、一向に減った気がしない!!」

彼の背後から2匹飛びかかる

「ふんッ!!」

キラークイーンのソバットがまとめて蹴り飛ばした

「くそっ…!!」

(わたしのキラークイーンのパワーならこいつらを倒すのは容易い…

だが、数が多すぎる…!!

何とかしなくては…)

すると彼は少女を抱き抱えると

また飛びかかって来た魔獣の首をキラークイーンに掴ませた

「道を開けろキラークイーン!!」

そう言うのと、掴んだ魔獣を一方の群れに向かって投げた

カチツ

スイッチ音が鳴ると、投げた魔獣が爆発し

数匹の魔獣もまとめて吹っ飛ばした

道が開くと、そこを駆け抜けて行つた

「一旦体制を立て直さなくては……」

そう言い、ひたすら走つた

飛びかかる魔獣達を蹴散らしながら進んで行く

2〜30m先にラムと別れた原っぱが見えた

(よし、あそこなら……!!)

そう思い、一瞬油断した瞬間

背後から来た魔獣に、左脚を噛まれた

「ぐっ……!!」

体勢を崩し、倒れた

「こ、このクソ犬!!」

ぶっ潰してやるッ:!!」

そう言うと

キラークイーンが左脚に噛み付いている魔獣の首を踏み潰した

急いで立ち上がろうとするが

3匹飛びかかって来た

「うおおおおおッ!!」

調子に乗るなよッ!!この:」

キラークイーンの拳が2匹の魔獣を粉碎する

プツツ~~~~ン

「ド畜生がア——ッ!!」

キラークイーンの渾身の蹴りが魔獣を大木目掛けて蹴り飛ばした

だが、再び魔獣が彼に向かって飛びついた

「クソ:!!」

反撃しようとした瞬間

魔獣の首が『風』に切断された

「!!」

「吉良!!」

声が出た方を見るとラムがいた

「待たせたわね」

「ふん、遅かったぞ…」

そう言いつつも、ちよつぱり笑顔で彼女の手には握まった

原っぱに出ると

ど真ん中に立ち、身構えた

「レムを噛んだのは頭の禿げてるチビ犬だ」

「わかった、足を引つ張らないでよね」

「ふん、それはわたしの台詞だ…」

そう言うと、彼は力強く『左手』を突き出した

『シアーハートアタック』ツ!!

こいつらを『爆破』しろッ!!」

そう叫ぶと、キラークイーンの左手から『それ』が飛び出した

《コツチヲ見ロツ!!》

「ラム、わたしの背後に隠れているんだ」

「え、何あれ…」

彼女が微妙な顔で見つめていると

魔獣がシアーハートアタックに飛びついた

が

《コツチヲ見ロオ!!》

シアーハートアタックが魔獣を弾き飛ばし

顔面に飛び付き、キヤタピラが魔獣の顔を削る

カチリ

するとシアーハートアタックが爆発し

魔獣を跡形もなく消し去った

キュル キュル キュル キュル

煙の中からキヤタピラの音がする

《今ノ爆発ハ人間ジャネエ、コツチヲ見口オ》

煙の中からシアーハートアタックが現れ

他の魔獣を目掛けて走り出す

「わたしのシアーハートアタックには弱点があつた…だが
物理的な攻撃には『無敵』だっ…!!」

第12話：シアーハートアタックは碎けない

《コツチヲ見ロオ!!》

キラークイーンの左手から発射された『シアーハートアタック』が

片っ端から魔獣達を跡形も無く消し飛ばして行く

「何あれ…」

「キラークイーン第2の爆弾『シアーハートアタック』だよ…」

わたしのスタンド、キラークイーンの左手から一発だけ発射出来る『自動追尾爆弾』さ

：

目につく標的は片端から木っ端微塵に爆破する…」

髪を整えながら彼女に解説する

「あつちはシアーハートアタックに任せておくとして

わたし達はこつちの奴らを始末しよう…」

「わかったわ」

そう言うのと彼女は魔獣達に向かって歩こうとしたところ

彼に肩を掴まれて止められた

「待て待て待て待て待て…

動いちやあダメだ…」

「は？」

「シアーハートアタックは『温度』の高いものを感知して、攻撃する…

動いて体温が上がったら…

シアーハートアタックは君に向かって来るんだよ…」

「じゃあ、どうするのよ…」

「わたしに考えがある…」

すると彼は彼女に顔を近づけて言う

「君、さつき見たところ…

『風』を操ることが出来るみたいだね…

君の魔法か何かだろう…

そこで、君に協力してほしいんだが…」

「…はあ、しようがないわね…」

すると2人は小声で作戦を話し合うと

身構えた

「いいか、『同時』にやるんだぞ？」

「わかってるわよ」

そう言い、彼女が腕を振ると

彼女の腕から刃物の様に鋭い風が飛んだ
すると

「今だッ!!キラークイーン!!」

キラークイーンがその風を手刀で叩いた

風は魔獣達に向かって飛んで行き

命中した
すると

カチツ

命中した風が大きな爆発を生んだ

「『第1の爆弾』：触れたものを爆弾に変える…

『空気』 + 『爆発』…

キラークイーンは1つの『物体』であれば何であろうが爆弾に変えられる…

例え、空気だろうと塊にすれば爆弾に出来る…」

爆発は、周囲の魔獣も巻き込み

複数体同時に吹っ飛ばした

「とんでもない能力ね…」

「ぼやぼやするな、続けて撃つぞ…!!」

「はいはい」

そう言い、風を爆弾に変えては遠距離から魔獣を爆殺するという作業を繰り返した

《コッチヲ見ロツ!!》

カチッ

《コッチヲ見ロツ!!》

カチッ

《コッチヲ見ロオオオオ!!》

シアーハートアタックが容赦無く魔獣達を片っ端から爆殺して行く

《今ノ爆発ハ人間ジャネエ》

キュルキュルとキャタピラの音を鳴らしながらじわじわと魔獣達に近寄る

すると魔獣の群の中からあの『子犬』が現れた
子犬が群の前に立つと

唸り声を上げながら体がどんどん変形して行き
他の魔獣より遥かに巨大な魔獣に変化した

「む、あのクソ犬…」

あんなに巨大になれたのか…

まあ、だからといってどうという事は無いがね…」

《コツチヲ見ロオ!!》

シアーハートアタックが巨大な魔獣に突撃するが

あつさり魔獣に踏み潰された

「あ!!ちよつと吉良!!」

あれ!えつと…あれ!踏み潰されたわよ!」

「ふくん」

「ふくん…つてちよつと!!」

ど、どうするのよ!」

すると彼は溜息をついて言った

「我がスタンド、キラークイーンの第2の爆弾…」

シアーハートアタックは…

狙った獲物は『絶対』に仕留める…」

カチツ

スイッチ音がすると

次の瞬間、魔獣の足が爆発した

すると、爆煙の中から

無傷のシアーハートアタックが飛び出し

魔獣の顔面に張り付いた

《コッチヲ見ロツ!!》

ギヤリギヤリとキヤタピラで魔獣の顔面を削りながら走り回る

「嘘お…踏み潰されたのに全然効いてない…」

「シアーハートアタックは何であろうが破壊出来ないよ…」

あの承太郎のスタンドにも耐えられるのだ…

あの程度の攻撃…傷一つつかないよ…」

すると、魔獣はシアーハートアタックを何とか振り落とすと

シアーハートアタックに奥歯で噛み付いた

《イデデデデ》

シアーハートアタックに少しずつ亀裂が走る

「あ、噛み砕く気?！」

「ふむ…」

歯というのはダイヤモンド並の強度を持つと聞く…

だが、シアーハートアタックは壊れんよ…」

《コツチヲオ…見ロオオオオオツ!!》

シアーハートアタックの髑髏の目が赤く光ると

ギヤリギヤリとキヤタピラで魔獣の奥歯を削った

すると、魔獣の奥歯が力に耐えきれず砕けた

「うわあ…」

つい、彼女は自分の顎を押さえた

シアーハートアタックは歯から脱出すると

魔獣の喉の奥に飛び込んで行った

カチッ

スイツチ音と共に魔獣の腹が爆ぜ

そこからシアーハートアタックが彼らのそばまで飛び出てきた

激しい呻き声を上げながら魔獣がのたうちまわる

「ふむ、流石にデカいだけあって中々死なないな…」

すると魔獣はふらつきながら立ち上がり、彼らに背を向けた

「!!逃げる気か!?!」

そうはさせるかツ!!」

すると彼はキラークイーンでシアーハートアタックを掴むと

キラークイーンは大きく振りかぶった

「ステイヴン・ルイスのピッチングの様に

豪速球でシアーハートアタックを叩き込んでやる…」

そう言い、渾身の力を込め

シアーハートアタックをぶん投げた

《コ
ツ
チ
ヲ
見
口
オ
オ
オ
オ
オ
オ
ツ
!
!
!》

シアーハートアタックは魔獣の後頭部にめり込み
メリメリと潜り込んで行くと爆発した

頭部のほとんどが消し飛び

魔獣は力無く倒れた

すると、他の魔獣達も何処かに去って行った

「これで今夜も…」

「安心して熟睡出来る…って？」

「…ふん」

ニヤつく彼女に先を読まれ

少しムツとした

シアーハートアタックを回収し

2人は少女を連れて村に戻った

すると、そこには村人達が待っていた

「おお!! 2人が戻って来たぞ!!」

「子供達を助けていたいただきありがとうございます!!」

「彼らは英雄だ!!」

「有難や、有難や」

村人達が2人に寄ってたかり

2人に感謝の言葉が雨霰のごとく降り注ぐ

(この吉良吉影…目立つことは最も嫌いなことだ…

こんな、寄ってたかってちやほやされるなど…

わたしは英雄なんかじゃあない…

ただ、自分の為にやったことなのだ…)

「悪いが、わたしは先に戻ってるよ…」

「え、ああ、わかったわ」

そう言い、少女を彼女に預けると

1人屋敷に戻った

「目立つのは嫌いだ…」

だが…悪い気分じゃあなかったな…

人助け…か…」

すると、彼は無意識に

少し微笑んでいた

屋敷に戻ると

彼は、レムを探した

「この部屋かな…?」

扉を開けると、ベッドにレムが寝ていた

顔を覗き込んで見ると、彼女の顔色は良く

ぐっすり眠っていた

「…!!」

(何だ…?)

この吉良吉影、今ホツとしたのか?

また…

いや、ホツとしたのは

わたし側のものが無事だったからだ…

そうだ、そうに違いない…

わたしが他人の心配など…)

そう思いながら、彼は自分の部屋にもどった

第13話：抑えられない殺人衝動

翌朝

パチツ　パチツ　パチツ

静かな朝

一つの部屋から漏れる音が廊下に鳴り響く

そこに、1人の少女がやって来た

パチツ　パチツ

少女は扉をノックし

中に入った

「失礼します……」

そこには、ベッドに腰掛け

窓の前でうずくまっている男性がいた

すると、男性は体を前に向けたまま

ゆっくりと振り向き、彼女に挨拶をした

「…おはよう」

「おはようございます」

挨拶をすると

彼は再び前を向いた

パチツ　パチツ　パチツ

すると、少女は気になり

そつと、彼が見ているものを覗いた

「あ…爪を切ってたんですか…」

「ああ、伸びてたからね…」

そう、答えると

彼は再び爪を切り始めた

数秒程、沈黙が続くと

彼が口を開いた

「気分は平気かい……？」

「え、あ、はい……」

「そうか……それはよかった……」

「あの……」

私を助けてくれたのって……

吉良さんなんですよね……？」

すると、彼は手を止め

少し、彼女の方を向いて答えた

「……そうだね

昨晚は大変だったよ……

犬に噛まれたし、追いかけて回されたよ……」

「その……迷惑をかけてごめんなさい……」

「べつに謝ることは無いだろう……？」

わたしが勝手にやって、勝手に助けたことだ

君はべつに悪くない……

でも、まあ……

元気になってよかったよ…」

「…ありがとうございます」

そう言うと、彼女は彼のベッドに座り

彼と背中を向き合わせた

「優しいんですね…吉良さんって」

「…」

そう言われるも

彼は自分の切った爪をジツと見つめていた

「…」

(最近…また、爪の伸びが早くなってきた気がする…

爪が伸びる時期は、気持ちを抑えられなくなる…

『手を切る』時期か…)

そう思っていると

彼の手の爪が、僅かに伸びた気がした

「あ、そろそろ朝の支度をしないと…」

吉良さんもお願ひしますね」

そう言うと、彼女は立ち上がり

部屋を出ていった

「『手を切る』時期か…」

(レムだったか…綺麗な『手』と顔をしている…)

だが、この屋敷の住人を殺すのはマズい…

あの、エミリアという女も

わたしの理想的な世の中を作ろうとしている…

殺すには惜しい…

こここの住人はわたしの味方になり得る存在だ…

やるなら何処か遠くに行く必要がある…

だが、迂闊に行動するのはマズい…

川尻早人の時のように、いつ何処で人に見られているかわからない…

慎重にやらなくては…

どうしたものか…)

窓から、少し曇った空を見上げた

着替えて、彼は朝の仕事を済ませた

いつの間にかロズワールも帰ってきていた

「君、昨日の晩

あの森に入つて魔獣を倒したんだらつて？」

「ああ、そうだが……？」

「凄いいじゃないの？」

魔獣の森に入つて生きて帰れるなんて、滅多に無くいよ？

ま、うちのレムを助けてくれたことには感謝するよ」

「……べつに助けたわけではない

ただ、わたし自身の為をやっただけだ……」

「ふくん？」

でも、結果的に助かったわけなくんだから

何かお礼をさせてくれなくいかな？」

すると、彼は静かに答えた

「なら……金が欲しい」

「金？」

少し意外そうな顔をした

「ああ、一気には言わない…」

「独り立ち出来るだけの金が集まれば、それでいい…」

「ふふくん？」

「何か企んでるのかわるかな？」

「べつに、企んでなどいない…」

「わたしは、普通に…平穩に暮らしたいだけだ…」

「まあ、それぐらいならお安い御用だよ」

「そう言うと、彼はウイंकをして」

「去って行った」

（金を貯めて、何処かの家を買えば…

そこを拠点に行動出来る…

変装する方法も考えなくてはな…

少しずつ…ゆっくりとやるんだ…

『彼女』さえ手に入れれば…

わたしはくつろいで…熟睡出来る…)

「フッフ…」

不気味な笑みを浮かべ
彼は部屋に戻っていった

第14話：秘められた欲火

彼の爪が伸び始めてから2日が過ぎた

「また…伸びたか…」

だが、まだ我慢だ…」

廊下を歩きながら、爪を見る

(ここ)を出るまでの辛抱だ…

誰も知らない場所…目立たない場所…

そこを拠点に出来れば、遠出と称して『彼女』を手に入れられる…

金は貯まった…あとは変装とタイミングだ…

まず、変装だが…どうするか…)

そう思うと、彼は立ち止まり

禁書庫に向かった

(何か、変装の方法など無いだろうか…?)

あの、書庫には色んな本がある

何か、役立つものがあればいいが…)

数分後

彼は禁書庫を見つげ

中に入ると、本を探し始めた

(何か無いか…何か…)

あの『シンデレラ』の時の様に、綺麗に顔を変えられる方法は無いだろうか…

変装…整形…魔法…何か…)

すると、彼はピンと閃いた

(魔法なら、何か出来るかもしれないな…)

メルヘンやファンタジーの様に、変身出来ないだろうか？)

そう思うや否や

彼は、片っ端から本を漁った

(変身…流石に無いか…)

だが、待て…

どうやら、傷を治癒させることが出来る魔法がある様だな…

それを使えば…

そうだ…!!

傷を『治す』ことが出来るなら、あの仗助のクレイジー・Dの様に
応用出来るかもしれないな

ものを『治す』能力というのは実に厄介だ…

だが、仗助に出来て、わたしに出来ないことなど無い…!!

なんとかしてこの魔法を手に入れたいものだが…どうするか…

やや険しい表情で、他の本を次々と読んで行くが

気になるものは見つからなかった

(魔法は基本的に一人一つか…)

精霊使いなら精霊と契約すればいくつか使える様だが…

わたしは契約などしないな…

人でなくとも、自分以外に正体を知られるわけにはいかない…

どうする…何か方法は無いか…

考えろ…考えるのだ、吉良吉影…

何か方法を…

見つからない方法を…

例え探られても、決して見つからない方法を…

BパIイTイEイ TツHァEダ DスUスSトTトは、わたしのミスで破られる可能性がある…

バレルのをやり直すには大きなリスクが必要だ…

方法を…

『失敗をやり直せる方法』を…)

カリカリと爪を齧り

深く考え込む

数時間考え込んだが

彼は方法を思いつけなかった

部屋に戻り、また考え込んだ

「クソツ…!!」

どうすればいいのだ…!!

爪が伸びる時期、わたしは『性』が抑えられない…

何とか我慢したとしても、精々あと1週間…

それを過ぎたら、わたしは衝動を抑えきれなくなり…

何をするかわからない…

ここの住民を殺したら、かなり目立ってしまうツ…!!

それだけは何と少しでも阻止しなくてはならない…!!
考えろ…考えるのだ…

何か方法を…!!」

ガリガリと爪を齧り

指先から血を流しながらも、深く考え込んだ

第15話：さらなる成長

5日後

彼は寝ていた

顔にも疲れが現れており

歩く時も、壁にもたれかからないと真っ直ぐ歩けない程だった

「あの…吉良さん…」

最近、大分具合が悪そうですけど…」

「ああ…大丈夫だよ…」

少し、疲れが取れないだけだよ…」

朝の仕事で、レム達に会っても

そんな返事しかしなくなっていた

激しい絶望感とストレスにより

彼は限界だった

(ダメだ…方法が無い…)

衝動を抑えるのも限界だ…

このままでは…わたしは…

疲労で倒れるか、彼女達を殺してしまう…

医学に詳しく無いが、ストレスは溜めすぎると危険だと聞いている…

死亡例もあるらしい…

このまま我慢し続けられれば、わたしは自滅してしまう…

下手に人を殺すことも出来ない…

どうすればいい…どうすれば…)

洗面所の鏡を見つめ

写っている自分の顔を見つめる

その時、彼の中で『何か』が切れた

彼は虚空を見つめながら自分の部屋に戻った

昼頃

部屋に籠っていると

レムが心配してやって来た

「吉良さん……本当に大丈夫なんですか……？」

今朝も様子が変でしたし……

何か悩み事があつたら、相談してください……」

彼女が部屋に入ると、彼は窓の外を見つめ

呟き出した

「自分の『爪』が伸びるのを止められない人間がいるだろうか？」

いない……

誰も爪が伸びるのを止められないように……

持つて生まれた『性』というのは誰にも止められない……

どうしようもない……

困ったものだ……」

「吉良さん……？」

彼女に詰め寄る

「『爪』こんなに伸びてるだろう……？」

彼女に伸びたボロボロの爪を見せる

「わたしは持つて生まれた『性』なものだから

前向きに考えてるんだよ…前向きにね…」

光の無い眼で、彼女を見つめ

彼女の手を握る

「君の『手』…」

とても滑らかな関節と皮膚をしてるね…

『ほおずり』…」

…してもいいかな…？

頬擦りするととても落ち着くんだ」

そう言うと彼は

彼女の手の甲を頬につけると

『頬擦り』をし始めた

「アフウウウウウウウ…」

「や、やめてください吉良さん…!!」

無理矢理引き離したが

すぐさま彼に『手』を掴まれた

「わたしは今まで…

主に『手』の綺麗な女性を48人殺した…

わたしは子供の頃…

レオナルド・ダ・ビンチの『モナリザ』の手…

あの絵…画集で初めて見た時…

なんというか…下品なんだがね…

『勃起』…しちゃってね…

『手』のところだけ切り抜いて、しばらく部屋に飾ってたんだ…

君のも切り抜きたい…」

「ひっ…!!」

カチツ

スイツチ音と共に

彼女の『手』以外が消滅した

「…」

彼女の『手』をしばらく見つめていると

彼は途轍もなく後悔した

「しまった…」

しまったしまったしまった…!!

我を忘れて、彼女を殺してしまった…!!

どうする…!?!

彼女を殺してしまった事がバレたら…この屋敷の住人達に…

いや、もつと広い範囲で目立ってしま…!!

これがバレるのに、そう時間は無い…!!

どうする…!?! どうする、どうすればいい!?!

指先を喰い千切る程爪を噛み

大量の汗を流しながら、考え込む

彼が激しく絶望していると

扉をノックする音が聞こえた

「!!」

「吉良? 最近、全然仕事が出来てないじゃない

また部屋に籠って何してるのよ?」

ラムの声だ

「…うぐっ…!!」

(マズい…)

よりによつて彼女だ…!!

この事を知られたら、相当マズい…!!

どうする!?

B I T E T H E D U S T はリスクが大きい…!!

もつと完全な…

『やり直す』様な能力でも無ければ…!!

『手』を握りしめていると

彼の体から黒い靄の様なものが出てきた

!?

ここ、これは…!?

すると

彼の意思とは無関係に

キラークイーンが体から出た

だが、そのキラークイーンは彼の見慣れたものとは違っていた

黒い靄を纏い

ドス黒い体をしている
血の様に紅い眼が光ると
彼の意識は遠のいていった

「……………さん」

誰かの声が聞こえる

「き……………さん」

聞き慣れた声だ

「吉良吉影さん」

「!!」

ハッと気付き、眼を凝らすと
彼の目の前にあつたのは爪切りをしている自分の手だった
そして、声のする方を見ると
レムがいた

鼻歌は扉の向こうから聞こえてくる

「」

段々とその鼻歌は近づいてくる

二人は唾を飲み込み

心の準備をした

ガチャ

「」

現れたのは『吉良吉影』だった

だが、違っていた

『吉良吉影』なのだが、彼女達の知る『吉良吉影』ではなかった

「き、金髪…!?!」

「しかも、すごい御機嫌!!」

2人は驚きを隠せなかった

今までの彼とは似ても似つかぬ

最早、別人と言える程変わっているのだ

彼は、調理場に入ると

窓硝子に映る自分を見ながら、ネクタイを整えた
鼻歌を歌いながら

「♪」

「あの…き、吉良吉影さんですよね…？」

「ん…？ そうだよ」

困惑した顔で話しかけると

彼は御機嫌な顔で答えた

「えっと…その、随分御機嫌そうです…ね」

「そうかな？ こんなに気持ちの良い天気だ

楽しい気持ちにもなるんじゃないかな？」

「は、はあ…」

そう言うと、彼女はラムと一緒に調理場を出た

「吉良さん、どうしちゃったのかな？」

「さあ…、まさか本当にボケたのかしら？」

小声で話し

扉の隙間から、彼を見ると

彼は今度は髪型も整え始めた

「ま、まさか本当に……」

「ボケたのかしら……」

しばらくすると

彼は調理場から出た

すると、彼は二人を見て

「すまないが、今日は仕事を休んでもいいかな？」

笑顔でそう言った

「え、あ、はい……いいですけど……」

「ありがとう、それじゃあちよつと出かけてくるよ……」

そう言い、再び鼻歌を歌いながら何処かに行った

「吉良さん……」

二人は困惑した顔のままだった

彼は、街に向かって歩いていった

「こんなに晴れ晴れとして絶好調な気持ちになったのはいつ以来…

いや、こんなに清々しい気分になったことなんて今までなかったな…

わたしは遂に『無敵』になった…!!

『無敵』…ククク…『無敵』だ…」

そう呟き

再び鼻歌を歌いながら歩いて行つた

街に着くと

彼は『手』の綺麗な女性を探し始めた

「さて、誰どれにするかな…」

そう呟き

彼は一人の若い女性に注目した

「『また』あの娘にするか…」

そう言い

彼女の後を追つた

しばらく歩くと

彼は、彼女とは別の道に外れた

そのまま歩き続けていると、狭い路地裏に入った

誰もいない、人1人が入れる程度の薄暗い路地裏だ

少し歩いた先は曲がり角になっていた

すると、彼は角に立ち

動かなくなった

数分後

その路地裏に若い女性がやって来た

彼が追いかけていた女性だ

彼女が曲がり角まで来ると、彼は道を塞いだ

「あ、あの…」

通らせてもらってもいいですか？」

少し困った顔で彼の顔を見ると

彼は数秒の沈黙後、口を開いた

「君の名は…なんだったかな…」

ああ、思い出した

確か、エリナさん…だったね」

そう言うのと、彼女は冷や汗をかき

僅かに後ろに下がった

「な…なんで…私の名前を知ってるんですか…」

「ん〜？」

さあ、『運命』ってやつかな…？

君は今、買い物に行ったところ…

財布を忘れたのに気付き、家に戻る途中…

この路地裏は、家への近道…かな？」

不敵な笑みを浮かべ、彼女を見つめると

彼女は、怯えた表情で少しづつ後退りする

「な、なんで知ってるんですか…!？」

「さつきも言わなかったかな？」

『運命』だと…

いや…運命なのかな…？

まあ、そんなことはどうでもいい…それより…」

そう言い、彼女の手を掴んだ

「君の手…とても綺麗だね…」

ちゃんと手入れをしているのかな…？

凄く綺麗だよ…」

指で彼女の手を撫で回し

手に顔を近づける

「い、嫌…!!」

無理矢理引き離したが、直ぐに手を掴まれた

「とても可愛いよ…でも…」

カチリ

「喋らない君は、もつと可愛いよ…」

スイツチ音がすると

彼女の手以外が消滅した

「清々しい…」

ああ、なんて清々しい気分なんだ…」

彼女の手を握りしめ

頬擦りをする

「しかし、『彼女』をあの屋敷に持ち込むのは難しいな…」

だが、もう『満足』したぞ…」

そう言うと、彼は『彼女』を上着の内ポケットにしまい

路地裏を出た

「後は『時』が来るのを待つだけだ…ククク…」

そう呟くと

彼は再び鼻歌を歌いながら、街をフラつきはじめた